

私たちが通う明治大学生田校舎には大型のタマムシが二種生息していることはご存じだろうか？

一つは「ヤマトタマムシ」。玉虫色で知られる緑色に光る甲虫である。

植保に在籍する者ならば知っていると思うが、生田校舎はヤマトタマムシの発生地として有名である。夏、食堂裏のエノキの巨木の頂きを飛び交う姿は見事なものである。

ヤマトタマムシは成虫時にエノキの葉を食べる。このエノキは幼木ではいけない。樹冠を飛び回り配偶者を探す性質を持つからだ。また幼虫の時はサクラ等、広葉樹の死木の中で朽木を食べて成長する。

生田校舎にはエノキの巨木、広葉樹の死木ともに揃っている。

もう一つは「ウバタマムシ」である。

漢字で書くと姥玉虫、いや烏羽玉虫だろう。「うばたま」は古典において、「黒」「髪」「闇」などにかかる枕詞である。つまり黒さを表す言葉であり、ウバタマムシは黒いタマムシであるとわかる。

ウバタマムシの大きさはヤマトタマムシと同程度で、色が黒といっても黒っぽいだけで灰褐色の一見地味な虫だ。しかし、手にとってよく観察すると黒地に金粉が吹いており何とも風流な虫であることがわかる。

成虫時にはマツの葉を食べ、幼虫でマツの弱った木や枯れ木を食い入って生活する。つまりマツ無しには生きていくことのできない生き物だ。

そして、神奈川県において準絶滅危惧種指定されている貴重な生き物だ。

この貴重な生物が生田校舎内で生活をしていることをどれだけの人が知っているだろうか。

2011年秋この北圃場手前のマツの樹で採集された。しかし、この樹はもうない。2012年の春に切り倒されてしまったのだ。

あの樹が最後の発生木だとしたらもう校舎内ではウバタマムシを二度とみることは叶わないだろう。

しかし、だれにも知られずに消えてしまったわけではない。

生活していた記憶は標本として、データとして確かに私たちが持っている。

かすかな生き物の息吹を伝え、保護の礎とするために私たちは収集しデータとして後世に残す必要性を植物保護研究部の一員として考えていかなければならないと思う。

2012年度 幹事長 兼 昆虫班班長